

『おくのほそ道』と歌枕（四）

萩原恭男

『おくのほそ道』における歌枕の扱いについて、本誌で三回にわたって論じてきた。本稿では、残りの「室の八島」「末の松山」「最上川」「種の浜」をとり上げて、しめくくりとする。

一

「室の八島」は、下野を代表する歌枕である。落柿舎滞在中の芭蕉の座右の書、『松葉名所和歌集』によると、下野の歌枕「黒髪山」が六首、「那須野」が四首であるのに対して、「室の八島」については、十六首の和歌が収められている。先ず本文を引用する。

室の八島に詣す。同行曾良が曰、「此神は木の花さくや姫の神と申て富士一躰也。無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ給ひしより室の八島と申。又煙を読習し侍もこの謂也」。将、このしろといふ

魚を禁ず。縁起の旨世に伝ふ事も侍し。

右のように、「室の八島」の章は、曾良がその縁起を語るという構成をとっている。「室の八島」の地名の起源は不明で、この名が最初に見えるのは、一〇世紀末成立と推定されている『古今和歌六帖』のその三で、

下野や室の八島にたつ煙思ひありとも今こそは知れ

読人知らず

とある。勅撰集では、『詞花和歌集』第七「恋上」の

いかでかは思ひありともしらすべき室の八島のけぶりな

らでは
藤原実方朝臣

が初見である。

この歌枕「室の八島」と、下野国都賀郡惣社村に鎮座する大神神社おのみわじんじやが結び付いた経緯も不明である。

この大神神社は、下野国の総社であった。総社について、『国史大辞典』8の解説を引用すると、

そうじゃ 総社 国・郡・郷などの一定地域内にある多くの神社の祭神を一カ所に集めて勧請した神社の称。惣社とも書く。寺院や荘園にも総社がおかれたが、最もよく知られているのは、国ごとに設けられた一国の総社である。国司は国内神社を管理祭祀することが任務とされ、国内、または国府近接の地域に一宮・二宮以下の国内神社の神々を一堂に集めて祀ったのに始まる。その初見は、『時範記』康和元年（一〇九九）二月十五日条に見える因幡国の総社であり、一宮制の成立時期とも一致し、十一世紀後半には、一宮・総社制の実体が備わっていたことになる。（中略）文献上、総社の存在を確認できるのは、鎌倉時代までの間に、因幡のほか、尾張・駿河・相模・武蔵・常陸・下野・若狭・加賀・安芸・淡路の国々があげられる。現在、その所在が確定できるのは、約五十カ国にのぼっている。

とあって「諸国総社一覽」の下野の項に、

大神神社 栃木県栃木市惣社町

と出ている。また、『下野国誌』三之卷「神祇鎮座」にも「総社六所大明神」を挙げ、

都賀郡国府にあり、社ある所を惣社村と云なり。（中略）

さて当社祭神は、木花開耶媛ノ命にて、相殿は天照大御神、天ノ忍穂耳ノ尊、日子香能爾々芸ノ尊、日子穂々手見ノ尊、大山祇命なりといえり。（中略）

さて当所は、室ノ八嶋にて、上の名所部に委しく記したり、されば室明神とも唱うるなり。

と記している。本文の「室の八嶋」で祭神としている木花開耶姫は、この総社六所大明神の祭神であった。

ところで、もともと右の総社六所大明神があったところに大神神社が祀られたのか、大神神社に総社が祀られたのかは明確な資料がない。『下野国誌』は「神祇鎮座」の「大神社」について、

鎮座詳ならず、今都賀郡国府の惣社明神の相殿に祀りてあり。（下略）

と記し、前者だとしている、

曾良が、大神神社の祭神「大国主命」について語らず、総社六所大明神の祭神、木花開耶姫をとり上げたのは、歌枕「室の八嶋」が「煙」とともに詠まれていることに理由がある。

木花開耶姫について、記紀に次のような神話が伝えられている。

日向の高千穂の峰に天降った瓊瓊杵尊は、大山祇神の二人の娘のうち、美しい木花開耶姫（『古事記』では木之花佐久夜毘売と記す）を召されたところ、一夜にして懐妊されたので、瓊瓊杵尊はわが子ではないと疑った。怒り恨んだ木花開耶姫は、戸の無い無戸室に入って火を放ち、その中で無事出産することによって、天孫の子であることを証明した。この

時誕生されたのが、火闌降命、彦火火出見尊、火明命である。

曾良の語った縁起は、この神話にもとづいている。木花開耶姫が無戸室に火を放ったことから「煙」が歌枕「室の八島」に詠みこまれるようになったというのである。

また、芭蕉は、『笈の小文』における紀行文観の中で、体験した事実をそのまま書いた紀行文では意味がないこと、黄山谷や蘇東坡のように珍しい素材、新しい表現がなければ、紀行文を書くべきではないと述べている。そして、浅智短才の自分が紀行文を書いた理由を、

其所くの風景心に残り、山館・野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所く跡や先やと書集侍るぞ、(後略)

と説明し、強く心に焼き付けられた風景や、忘れることのできない印象深いことが、話題となったり、自然に親しむ契機になればと考へてのことであると述べている。

芭蕉が「室の八島」を訪れて感銘を受けたのは、木花開耶姫の縁起であったことになる。そして、この縁起によって、「室の八島」と「煙」とが無理なく結びつくことに納得したものと思われる。

さて、「このしろ」については、『下野国誌』の「室ノ八島」に、

惣社明神の神事に、毎歳九月九日、鰯コノシロを焼てささぐることは古例なりといえり。

と説明し、さらに「総社六所大明神」の項において、

祭礼は毎歳八月朔日、内陣に蔵めおく、一口の鉾を形代として、旅所に出し、九月八日の夜、もとの内陣に納むるなり。(中略)さて翌九日広前コノシロにて鰯を焼てささぐ、此日国府村、田村の両村より、判官と唱うる者十二人、年番に出て神事をつとむるなり。

と祭礼最後の神事であると記している。鰯を供物とする理由については不明であるが、芭蕉が禁忌としているのは反対である。

人見必大著『本朝食鑑』の「鰯このしろ」の項に、人から聞いた話として「室の八島の富商の娘が国守から差し出す言われ、娘に恋人がいると知っていた親が、病死したといつわって、柩の中に多量の鰯を入れて焼き、身代わりにした」という記事のをせている。この魚を焼くと人体のこげるにおいがする、ということとは広く知られていたのである。そして、このことは自ら火を放って自分をお焼きになった木花開耶姫の神話につながる。姫の苦しみを想い、この魚が禁忌となったとは、何をよりどころにしたかは不明であるが、自然な展開である。また、「室の八島」の祭神と、コノシロ禁忌については、他の話もあるため、「縁起の旨世に伝ふ事も侍し」と結んでいるのである。

この章は、歌枕「室の八島」が主題である。一般に、大神神社がそれにあたると考えられている。しかし、芭蕉は、大

神神社の祭神大國主命をとりあげず、総社六所大明神のうちの木花開耶姫を祭神とした曾良の縁起譚を中心に構成している。歌枕「室の八島」に必ず詠み込まれる「煙」と、木花開耶姫が無戸室に入って自ら放った「火」が、無理なく結びつくからである。

そして、芭蕉の意図は、歌枕「室の八島」を主題としながら、実質的にはその縁起を語る曾良が同伴者であることを、それとなく示すことにあった。

同伴者曾良は「日光」の章で本格的に紹介されるが、それまで同伴者が不明であるというのは不自然である。そのため、「室の八島」で曾良の登場となったのである。ここで曾良は、神社の縁起について独自の見解を示している。つまり、神道に詳しい人物であることが理解される。この教養人曾良の人物像は、次章「仏五左衛門」の無智無分別な人柄と対比されて、それぞれの人物の特色が際立つという効果をあげている。

『おくのほそ道』の全体の展開から見ると、草加の次に日光では地理的に離れてすぎている。そこで下野の代表的歌枕「室の八島」を其の中間に配したのは、当を得た構成である。「俳諧師芭蕉の旅において「室の八島」は逸することのできな歌枕であった。そこに同伴者曾良を出したのは、芭蕉の巧みな工夫である。

二

「末の松山」の章は、「武隈」「宮城野」「壺碑」と続く歌枕探訪の流れを受け継いでいる。その本文を引く。

それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は、寺を造て末松山といふ。松のあひく皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごときと、悲しさも増りて、塩がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蟹の小舟こぎつれて、肴わかつ声くくに、「つなでかなしも」とよみけん心もしられて、いとゞ哀也。其夜盲目法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしましけれど、さすがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝に覚らる。

この章は二段に分けることができる。前章「壺碑」の無常観をそのまま引き継いだ「入相のかねを聞」までの前半と、それ以下の後半である。

前半は、歌枕探訪の続きで、野田の玉川・沖の石・末の松山を巡っている。「末の松山」では、辺りが墓地になっているのを見て、愛し合う男女がどんなに気持ちは変わらないと誓い合っても、遂には死を迎えることになるという人の世の無常を改めて実感するのである。塩釜の浦で聞く「入相のか

ね」は、今日一日が暮れたことを告げるとともに、悲しみをいやが上にも誘うように響く。

後半は、五月雨の空が晴れると気分も変わって、塩釜港ならではの地方色に興味の中心が移っている。雨雲が去ると、夕月もほんのりと光って、「籬が島」も目近に見渡される。『古今集』の東歌では、引き綱で移動する漁船の情景が心にしみておもしろいと詠んでいるのだが、芭蕉は、船から引き揚げた魚を漁師たちが種分けしている大声に心ひかれたのである。伊賀上野の山国で育った芭蕉には始めての珍しい体験であったに違いない。古典的情緒を踏まえながら、現在の体験を描くことによって、すり上げたのである。ここに芭蕉の新しいみがある。

芭蕉が次に取り上げた地方色は、「奥浄瑠璃」である。奥州（現在の宮城県、岩手県地方）で行われていたもので、御国浄瑠璃・仙台浄瑠璃とも呼ばれている。塩釜港は、当時、塩釜浦・千賀塩釜・ちがのうら、といい、藩主伊達綱村以来とくに保護をうけ、北方領域の年貢米、三陸地方の材木・海産物を仙台の城下町に運び入れるための外港として栄えていた。諸国からの商人・船人らの泊る旅籠屋には下女の名目で遊女がおり、藩もこれを黙認していた。遊興の場を盛り上げるため、本来は門付芸である奥浄瑠璃を語るボサマ・座頭の坊も、その席に呼び上げることもあったと思われる。芭蕉の枕もと近く隣り合う旅籠から奥浄瑠璃の語りが聞こえて来た

のである。奥浄瑠璃の正本は、江戸からもたらされた古浄瑠璃正本の刊本を使っていたという。その曲目には「尼公物語」「烏帽子折」「牛若東下り」などの判官ものもあった。『奥細道菅菰抄』にも「多く義経奥州下りの事など作りて語る也」とある。これから義経最期の地である平泉へと志していた芭蕉は、特に興味深く聞き入ったことと思われる。

この章は、仙台を発足以来、画工加衛門の地図に従っての歌枕巡歴のしめくりとなっている。「壺碑」の無常観を引き続いだ前半は、もの悲しい気分浸っているが、夕方になって梅雨空が晴れると気分も一変する。塩釜浦での威勢のよい魚の水揚げのかけ声から、夜の旅籠での奥浄瑠璃のひなびた語りへと、静から動、景から人事へと変化する。判官物を曲目とする奥浄瑠璃は、はるかな平泉への伏線ともなっているという構成である。また、夜の旅籠の出来事は、次章の塩釜明神への早朝参詣との対比が意図されている。ここにも、常に前後の章とのつながりに配慮している芭蕉の創意を見ることができる。

三

『おくのほそ道』の旅において、歌枕としての川は、阿武隈川・名取川・野田の玉川・衣川・最上川である。その中で、芭蕉が最も印象深いと感じたのは、本合海から古口で舟を乗り継ぎ清川まで船下りした最上川であった。『名所方角抄』

は「出羽国分」の最初にあげ、「早川也」として、

最上川のぼればくだるいな舟のいなにハあらず此月ばかり

最上川かげこそ同じいな舟ののぼれば下るきしの青柳の二首を引用している。芭蕉も急流ということを主題にまためている。本文を引用する。

最上川は、みちのくより出て、山形を水上とす。ごてん・はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな船といふならし。白糸の滝は青葉の隙くゝに落て、仙人堂、岸に臨て立。水みなぎって舟あやうし。

五月雨をあつめて早し最上川

芭蕉は、まず最上川の全体像を概略的に述べ、みちのくを源流として、基点・隼などという難所を経て、酒田で海に流れこむと書いている。源流については、『菅菰妙』が「同国米沢より出る大河なり」と注をしているように、芭蕉の記述は誤りである。『山形県の地名』（日本歴史地名大系）によると、山形県南端、吾妻山北面に源を発し、内陸の米沢・長井・山形・新庄の各盆地を貫流、それらの盆地内のすべての河川を合わせて庄内平野に入り、同平野をほぼ北流して酒田市で日本海に流入する一級河川。

とある。芭蕉は、最上川が陸奥国と出羽国の二つの国をまた

がる大河であることを印象付けるため「みちのくより出て」と記述したのである。また基点・隼といった難所の名を挙げたのは、最上川が急流であることを具体的に示すためであった。この二つは、三ヶ瀬とともに最上川の三難所と呼ばれ、河床に岩塊が露出して舟運には大変危険な場所であったが、大石田よりはるか上流にあった。板敷山は歌枕で、万治三年刊の『松葉名所和歌集』には出ているが、寛文六年刊の『名所方角抄』には採られていない。歌は『松葉名所和歌集』に「板敷山 出羽 夫木」として、

みちのくにちかき出羽のいたゞきの山にとしふる我ぞわびしき

と一首のみが見えある。このように知名度の低い歌枕の名を出したのは、歌枕を極力文中に取り込もうとする芭蕉の意図の表れである。

次に芭蕉は、最上川の舟下りの様子を記述している。古口から清川までは、最上川が出羽山地を越える地点で、山内（最上峡）と呼ばれていた。特に古口から仙人堂のあたりまでは、右岸に三百メートル前後の崖が連続し、左岸も三百メートルから四百メートルを越える山が迫っている峡谷で、先の三難所と並ぶ難所であった。「左右山覆ひ、茂みの中に船を下す」は、その印象を簡潔に表現したものである。

「いな船」は、『古今和歌集』『東歌』の陸奥歌に、

最上河のぼれば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

と歌われている。この舟は沿岸の農民が農作業に使用していた細長い底の浅い小舟である。

ところで、この東歌が、「最上川」の文献上の初出である。『日本歴史地名大系』によれば、以後古代・中世には上流のあたりから河口に至るまでを最上川と記した資料はなく、最上川の舟運が整備された近世以降に最上川の名称が一般的になったと思われる、という。

この「稲船」によって、歌枕最上川の本歌である『古今和歌集』の東歌が想起される。短文ではあるが、峻険な峡谷の急流から優雅な古歌への世界へとみごとな転換である。この優しさは、「白糸の滝」の糸のように細いという景観につながっていく。そして、青葉との対比もあざやかである。

続いて「仙人掌」の一文について言及すべきであるが、こゝは、「五月雨をあつめて早し最上川」の推敲にかかわっているため、まず、右の句の初案形について考察する。

芭蕉は、五月二十九日（陽暦七月十五日）大石田河岸の船宿高野平右衛門（俳号一栄）亭での俳諧興行に出席し、

五月雨を集て涼し最上川

と発句を詠んだ。降り続く五月雨で大小の支流の流れ込む最上川は、見るからに水量が豊かで涼し気です、と挨拶したのである。暑さの折、涼しいことが何よりのもてなしだ、と土地柄をほめたのである。「最上川」は涼しさを言うための素材でしかない。

しかし、本文では「最上川」そのものが主題で本情は「急流」である。後に最上川、球磨川とともに日本三大急流と称される富士川も『名所方角抄』に出ているが「早川」とはない。最上川は急流として広く知られていたのである。

芭蕉は、『おくのほそ道』において、どのように急流としての水勢を具体的に表現するか、苦心を払っている。実際には見てもいない「碁点・隼」の難所を先に出しているのも、その伏線である。さらに、上流の仙人掌を、下流の白糸の滝より後に配し、

仙人掌、岸に臨て立。水みなぎって舟あやうし。

と記したのも「立つ」という語勢が、「早し」に照応するからである。このような応じ方は、連句で云う「響」である。『赤冊子』は「響」について、次のように説明している。

青天に有明月の朝ぼらけ

湖水の秋の比良のはつ霜

前句の初五の響に心を起し、湖水の秋、比良の初霜と、

清く冷じく大なる風景を寄。

右の付合は、『猿蓑』所収の「はつしぐれの巻」の二九句目（去来）と三〇句目（芭蕉）である。前句は、青く高々と晴れ上がった明け方の空には有明月がかかって、冷え冷えとした大気が満ちているの意である。付句は、その「青天に」の凜とした爽快な気分を感じ取って琵琶湖上の秋の景と見定めて、湖辺の秋も深まって、西岸にそびえる比良の山には、

初霜の降りるころである、とこの上なく清々しく大きな景観を具象して応じたのである。このように、前句の言葉の勢いをそのまま付句に生かす付け方を「響」というのである。

なお、「涼し」を「早し」に推敲した理由については、実際に最上川を船下りしてみると「水みなぎって舟あやうし」という状態だったため、「涼し」では実感と離れていたことを知り、「早し」に改めたとする説がある。しかし、実際に何度も船下りした体験からいえば、船が転覆しそうなときには船下りをするはずはない。

普通の日は一向に流れは早くなく、船頭さんも「川の表面は早くないので、川底の流れが早いのです」などと弁解めいた説明をしている。ある年の最上川船下りは、前日雨が降ったため運航が中止になってしまった。そのとき、最上川の左岸を平行して走る陸羽西線の車窓から眺めた流れの早さは、すさまじいの一語に尽きるものであった。川幅いっぱいには水はあふれ、水かさ一メートル足らずで岸に達するほどの勢いであった。チョコレート色をした濁流は、矢のような速さで下っていた。川面の浮遊物が、私の乗車している列車を追い抜いていくのである。急流最上川が正にそこにあった。最上川の一文は、無駄のない構成によって、最上川の本情を見事に描き出した名文である。

終わりに、最上川の章の前半、大石田での俳諧興行を主題とした一文の冒頭、

最上川のらんと、大石田と云所に日和を待。

について述べておきたい。これを踏まえると、芭蕉は大石田河岸から乗船したように受け取れる。しかし、事實は『曾良旅日記』に記すごとく本合海河岸からの乗船であった。大石田河岸は、最上川の中流に位置し同川最大の河岸であった。その役割は、幕府の城米や諸藩の蔵米を酒田湊に下すことにあった。そして、これらの領主荷物運送を低運賃で請負う代わりに商人荷物の運送が許されていたのである。大石田河岸には旅人が利用できる舟運はなかったのである。芭蕉が大石田の地名を出したのは、旅の楽しみの一つである地方俳人と俳諧興行がこの地で行われたためである。

四

「種の浜」は、「おくのほそ道」の旅において芭蕉が最期に訪れた歌枕である。『能因歌枕』などに出ているが、芭蕉の座右の書『松葉名所和歌集』には採り上げていない。芭蕉が目にすることができたと考えられる江戸時代の歌枕歌集類の中で、「種の浜」の歌が見えるのは『歌枕名寄』（万治二年刊）のみである。引用されているのは、

降雪のいろのはまべのしろたへにそれともわかぬむらち
どりかな
中務卿親王

しほくむとますほのこがひひろふとていろのはまとい
ふにやあるらん
西行

の二首で、芭蕉がこの浜を訪れたのは、西行を慕ってのことである。本文を引く。

十六日、空齋たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の浜に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹着ぬ。浜はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたゝめて、夕ぐれのわびしき、感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

この章は三つに分けることができる。第一段は、「吹着ぬ」まで、第二段は、「浪の間や」の句まで、そして、第三段は、「其日のあらまし」以下の文である。

第一段は、はじめに「十六日」と日付がある。これは、「敦賀」の

十五日、亭主の詞にたがはず雨降。

の「十五日」に対応したもので、日付が一日のみ記してあるのは不自然であるため、出したものである。『おくのほそ道』は、日付をあげて、その日の出来事を記すという日次の紀行文の形をとっていない。しかし、紀行文である以上、時間の経過を示す必要があるし、文の内容によっては、「日光」の章のように、「衣更」に対応させて「卯月朔日」と日付を出

さなければならいこともある。その折は、「卅日」を前章「仏五左衛門」の冒頭に出し、一日続けて日付を記している。一日分だけ日付を示すという例はない。ここも、前日の雨天に対し、晴天となったという対比が、日付によって強く印象付けられている。

第一段の冒頭で芭蕉は、「ますほの小貝」を拾ふために「種の浜」に出かけた、と目的をはっきり示している。西行ゆかりの地を一刻も早く訪れたいという心の躍動が「走す」に端的に表現されている。「種の浜」までの船を支度してくられた廻船問屋の天屋五郎右衛門は、俳号を玄流といって俳諧のたしなみもあった。本文であえて「天屋何某」としたのは、実名をあげると、その日の体験をそのまま記す日次の紀行文のようにするため避けたのである。

弁当や酒、さらには芭蕉の世話をするための下僕まで同伴させた天屋の気の利いた配慮に芭蕉は一層心がはずんだことだろう。風も順風で、あつという間に「種の浜」に着いた。

「種の浜」は、ひっそりとした漁村であった。享保十二年の敦賀郷方覚書によれば、家数十七、人口は百十四人であったという。天屋からの紹介もあったのだろう浜近くの本隆寺で休憩し、持参の酒をあたたためて杯を傾けていると、「種の浜」の風情が芭蕉の心を強く打ったのである。わずかに漁師の小さな家だけがある浜の光景を見たとき、芭蕉が脳裏に思い浮かべたであろう歌は、定家の

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮
(新古今和歌集)

ではなかったか。

芭蕉は、この「種の浜」の寂しさを、「須磨にかちたる」と詠んだ。どうしてそのように断定したのか。須磨については、貞享五年四月二十日、須磨で一泊した折の印象を

かゝる所の秋なりけりとかや。此浦の実は秋をむねとす
るなるべし。かなしさ、さびしさはむかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをもいひ出べき物と思ふぞ、
我心匠の拙なきをしらぬに似たり。(後略)

と述べている。「かゝる所の秋なりけり」は『源氏物語』の「須磨の巻」によっている。自ら攝津国須磨に退去した源氏の住居は、海辺から少し奥へ入ったところにあり、在原行平中納言が「藻塩たれつつわび」という伝説の地に近く、人の心を痛ましめる秋風によって、毎夜浦波が間近に聞こえ、

またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。
とある。この上もなくしみじみと心にしみ入るような趣のあるものは、このような配所の淋しい秋である、という。

芭蕉が、「かなしさ、さびしさはむかたなく」と嘆じたのは、配所須磨に謫居していた折の源氏の心境を思いやったものであった。華やかな都での宮廷生活から一転して、藻塩焼く浦近くひっそりと暮す境遇の変化を、どんなにかわびしく感じたことであろう、と思いはかったのである。物語の世

界のことであっても、現にその地にたつての実感であった。人の世の本質を無常と感じている芭蕉にとって、天皇の御子である源氏の配所の暮しは、栄枯盛衰を繰り返す人間の営みそのものであると感じたのである。こうしてみると、須磨のさびしさは、『源氏物語』の「須磨の巻」によって触発された情調といえる。光源氏の境遇、その心情に導かれた「さびしさ」であった。

それに対して、「種の浜」は、何一つ目を引くもののない殺風景な浜そのものが、寂しさを実感させたのである。古典的情趣とは無縁の、貧弱な漁師の苦屋が十数軒あるだけの浜辺は、むしろ荒涼といってもよいほどであったと思われる。つまり、『笈の小文』の折の、須磨のさびしさは、古典の世界を介して醸し出された、人為的な情趣であるのに対して、「種の浜」のさびしさは、あるがままの自然の興趣である。「種の浜」そのものが、さびしさを具現していたのである。この浜のさびしさを感ずるのにどんな介在物も必要としないのである。

芭蕉が「種の浜」の印象を一句にまとめるとき、前年訪れた須磨のことを思い浮かべたに相違ない。「種の浜」のさびしさは他とくらべようがないと実感したとき、古来名高い須磨の秋のさびしさに「かちたる」と表現したのである。

さて、「浪の間や小貝にまじる萩の塵」は、「ますほの小貝ひろはんと、種の浜に舟を走す」に照応させたものである。

さざ波が寄せては返すその波と波の間に、ますほの小貝にまじって萩の花屑が散っている、の意である。「寂しさや」の句が、浜全体の印象を詠んでいるのに対し、部分的な浜辺の景を詠じたのである。連句で言う脇である。脇は発句の世界にありながら、発句の表面に詠まれていないものを見出して添える添付を基本としている。「浪の間や」は、発句に対する脇の役割を果たしている。「種の浜」の秋は、いいようもなく寂しいのであるが、ふと見ると打ち寄せる波の間に、ますほの小貝にまじって同じ色合の萩の花屑が浮かんで、風情を見せている、というのである。

ますほの小貝を拾いに「種の浜」にでかけながら、そのことを主題とせず、「種の浜」の本情はさびしさにある、としたのが俳諧で、芭蕉の新しみなのである。同行した等栽も「種の浜」の本隆寺に懐紙を残している。その文をみると、「西行の和歌とますほの小貝によって構成しており、芭蕉の『おくのほそ道』の本文とは対照的である。

等栽懐紙に関する最期の一行は、「一振」の「曾良にかたれば、書とぐめ侍る」に通じる表現で、感動の一通りでないことを強調し、余韻をもってしめくりとしたのである。

この章の前半は、まず西行の和歌に詠まれた「ますほの小貝」を拾おうと舟出し、「種の浜」への期待の高まりを余情とする一方、天屋のこまやかな心配りも心地よい。後半は、「種の浜」のこれといって目を引くものが全くないさびしさに

強い感銘を受け、「須磨にかちたる」と吟じる。そして、その余韻を最後の一文で結ぶという緊密な構成がみごとである。

五

以上、『おくのほそ道』において、一章の中心となるような形で歌枕を扱っている「室の八島」「那須」「白川の関」「あさか山」「しのぶの里」「武隈の松」「宮城野」「壺の碑」「末の松山」「松島」「最上川」「象潟」「種の浜」の一三章の検討を終えた。ここであらためて、芭蕉の歌枕の扱い方をまとめておきたい。

芭蕉が先行の紀行文のなかで代表作の一つとしてあげた『東関紀行』では、京都から鎌倉まで下る途中の歌枕が丹念にとり上げられている。そして、滋賀県蒲生郡の歌枕鏡山にちなんで、

立ちよらでけふは過ぎなん鏡山しらぬ翁の影は見ずともと詠んでいるように、野路、篠原、老曾の森など一五ヶ所の地で和歌を詠じ、その風情を楽しんでいる。

また、『十六夜日記』も、粟田口から逢坂を越えて東海道を下り鎌倉に至るいわゆる「道の記」の部分で、逢坂の関・野路の篠原以下十六ヶ所の地で歌を詠んでいる。これは、都に残した為相らに対して歌枕詠作の手本を示すためであったという。

これに対して、芭蕉が歌枕の地で、句を出しているのは、

「しのぶの里」「武隈」「最上川」「象潟」「種の浜」の五章に過ぎない。歌枕の地を訪れては、几帳面に句を詠むということをくり返すと、紀行文の流れが単調になるからである。

もっとも、「那須野」については、殺生石に向かう途中で詠んだ

野を横に馬牽むけよほととぎす

が代用しているし、「白川の関」では句を案じ、曾良も『旅日記』に芭蕉の句を書留めたが、結局本文には取り上げなかったという場合もある。

芭蕉が歌枕を『おくのほそ道』に出す場合、全体の構成上、どこに配置したら効果的であるかを考えている。

「室の八島」は、その縁起を語る曾良が神道に造詣深いことを示すためであった。「那須野」では、道に迷ったら心配だと馬を貸してくれた旅人に対する農夫の親切心を描き、その子供「かさね」を出して可憐さを添えている。「白川の関」では、秋風、紅葉を詠んだ名歌とは違って初夏に訪れた折の風情を中心とし、和歌の伝統では、ほととぎすと取りあわせて読まれる卯の花を、「かざしに関の晴着」とする俳諧の自由が表わされている。

「あさか山」においては、和歌で「かつ」を引き出すために用いられていた「花かつみ」を一日がかりで探し求めるといふ風流のしれ者ぶりを描き、同様に、「しのぶの里」では、「乱れ」を出すための表現として使われた「もぢずり」がど

のように染め出されたのか、是非自分の目で見たいという憧れを句に詠じている。「武隈の松」は、江戸出立の折の挙白の饒別吟に対する「桜より」の句を出して、「草加」の「あはるはさがたき餞などしたるは」に照応させている。画工加右衛門が歌枕を案内することで、彼が風流のしれものであることを描いているのが「宮城野」である。多くの歌枕が跡形もなく消滅していく中で、千年も前の姿をそのまま留めていることに感動した「壺碑」は、冒頭の無常観に照応している。これに続く「末の松山」は、野田の玉川・沖の石と歌枕めぐりに時間を費やすうち塩釜で入相の鐘を聞くことになり、歌枕が集中しているこの地方の特色が描かれている。「松島」「象潟」は、ともに「山野海浜の美景に造化の功を見」た代表的な風光で、太平洋側と日本海側との対比も自ずから感じとれる。船下りの日和を待つ間に俳諧を興行するという大石田を前半にした「最上川」は、後半でその流れの早さを描き、前半の人事・静を景・動と一変させた対比が鮮やかである。この対比が「種の浜」においても生かされていることは先に述べた通りである。

以上考察したように、芭蕉は歌枕を訪れても、その古典的情趣を再現しようとはしていない。和歌的世界から離れるようとする姿勢を貫いている。先行の紀行文にない新しみを追求するならば、当然のことであろう。そこに一貫しているのは、現在の体験を書くということである。

その体験は現実の体験ではない。たとえば、あさか山で「花かつみ」を一日中探し続けるという行為は、風雅の誠を追及する俳諧者であるならば、そうしなければならぬはずのものである。和歌に詠まれているあさか沼の現地に来ていて、ただ何もせず通り過ぎたのでは風流の旅とはいえない。「花かつみ」を尋ね歩くというのは、芭蕉の内面の真実を語っているのである。

そして、旅の行程中にはない歌枕の名も落とさないように工夫している。日光の「黒髪山」は、曾良の

剃捨て黒髪山に衣更

に詠みこまれている。黒髪のことばから、出立の暁、頭を剃って僧体になったことを思い出し、四月朔日の衣更に際し、改めて師の旅をいたわろうとの決意を詠んだのである。「黒髪山」の地名があつての吟である。つまり、同伴者曾良を紹介するこの文では、「黒髪山」はどうしても欠くことのできない地名なのである。

「石巻」の章では、平泉へと目指し、まず「あねはの松」「緒だえの橋」を尋ねようとして道に迷い石巻に出た、という構成になっている。ここでも二ヶ所の歌枕が、繁華な湊町石巻に至るための重要な契機になっている。

また、実際に訪れている「衣川」「衣が関」は、平泉での藤原三代の栄耀の跡を大観する文章の中で出ているにすぎない。この他の和歌の扱いを大別して整理しておく。

○通過点としての歌枕

安達原（黒塚の岩屋）・あぶくま川・名取川・おくのほそ道・十符の管・岩手の里・那古の浦・卯の花山・あさむづの橋・玉江・鶯の関・かへる山

○遠望した歌枕

不二の峰・会津根・袖のわたり・尾ぶちの牧・まの、菅原・板敷山・有磯海・白根が獄

○地名のみの歌枕

しのぶ・金花山・出羽・担籠・那智・谷汲・有明（間）・つるが・須磨・伊勢・ふたみ

なお、月山は、芭蕉の座右の書『松葉名所和歌集』に「月之山」としてあげているが、他の歌枕和歌集類には取り上げていない。

『おくのほそ道』の歌枕は、「白川の関」「壺碑」「最上川」のように章の中心にすえられる場合もあれば、「日光」の同伴者曾良の紹介のところ、句の中に素材として詠みこまれもする（黒髪山）。「しのぶの里」では、今は絶えてしまった忍摺の染め方を是非とも見たいものだという風雅に憧れる心が描かれている。

この歌枕のさまざまな扱い方に『おくのほそ道』の新しさがある。それが紀行文全体の流れに変化をもたらし、その多様さが『おくのほそ道』の尽きることはない興味となっている。

（完）